

Title	<雜録> 太平天國とわが遣清使節
Author(s)	杜氏, 嘉造
Citation	東洋史研究 (1942), 7(5): 351-351
Issue Date	1942-10-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/138844
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

太平天國とわが遣清使節

江戸幕府が長く踏襲し來つた鎖國の方針を抛棄し開國を強ひられるに至り、茲に進んで支那への出貿易を試みられるやうになつた。その第一回は文久二年(同治元年)、幕府の費用で實行せられた。その乗船は千歳丸、行先は清國上海。千歳丸といふのはその八年前に作られた英國の帆船アーミステス號(三五八噸)を幕府が長崎で買上げ改名したものである。その大きさは長二十一間、幅四間四尺、深三間五尺、帆樁三。價は洋銀三萬四千元といふ。乗込員は邦人五十一名、英人十五名、蘭人一名、計六十七名。邦人は幕府の役人、長崎の商人その他従者として諸藩より選抜され、年少氣鋭の士がゐた。萩藩の高杉晋作、後にわが海軍の創設に功績があり中將にまで昇つた佐賀藩の中牟田倉之助は夫々小人目附の犬塚、鹽澤の従者として乗込んでゐた。薩州藩の五代才助(友厚)も水手に身を扮して同乗してゐた。同僚日比野丈夫君の王父が尾州藩より簡拔され支配勘定役金子兵吉の従者としてこの船に乗込んでゐたことは我々にとつて殊に興味深い。加ふるにこの時の紀行「餐牀録」と上海に於て清人と筆談した記録「沒鼻筆語」とが残されてゐるのは嬉しい。それに據ると文久二年四月二十九日長崎發、五月六日上海着。二ヶ月間上海に滞在、七月一日上海を離れ十四日長崎に歸着したのである。その間異國の事物に觸れて詳しい叙述があり感慨が洩らされてゐるが、太平天國

に就いては殊に關心があつたやうである。上海上陸の前日即ち五月五日の條に「晴下西ニ火焰ヲ照ス」と見え、六日の條に「余昨日西方ニ起リシ火焰ヲ問フニ王誠齋ノ答ニ七保鎮ト云フ處ニテ賊ノ戰爭アリシヨシ」とあつて、太平天國亂下の上海が眼前に髣髴としてゐる。従つて二ヶ月の滞在中にも太平天國に關する圖書が數多く記されてゐる。一方この戰亂の最中に邦人が大勢突如として出現したために支那人の間に色々風聞が立つたらしい。日比野君の王父と醫者の春給なる者との間に左の如き會話が交へられてゐるのは面白い。

日比野氏曰く「我國人初メテ貴邦ニ到ル。必ず市間ノ風説アラシク敢ヘテ問フ」。春給答へて曰く「貴邦ノ人初メテ此地ニ到ル。民間傳言スラク英夷東洋ニ至リ兵三萬ヲ借り萬城ヲ破ルベシト。並ビニ云フ内ニ法術二人アリト。此ノ諸ハ萬城ノ内ニモ連リ長毛(長髮賊ナリ)モ亦コノ信ヲ聞ク。今ニ至リ先生ノ處ニ到リハジメテ一切所謂十里ソノ信ナキヲ知ル」。問「萬城ハ何州ニ在リヤ。且賊匪ノ據ル所ナルヤ」。答「蘇州ニ在リ。是長毛ノ駐札ノ所ニ係ル」。問「兄聞ク所ノ二人ナル者ソノ姓名如何」。答曰「傳ヘテ言フ、貴邦ノ人一ハ名ヲ克原額トイヒ一ハ名ヲ廣眞子ト云フ。一ハ能ク雲ニ騰ツテ人ヲ殺シ一ハ能ク一日千里ヲ行ク」。

蘇州に在つた忠王李秀成の陣營に、この風聞が如何程の影響を與へたか今知るすべもないが太平天國の一異聞として注目さるべき事であらう。(杜氏嘉蓮)